

「戦時下における児童文化」について（その九）

——「東日小学生新聞」の「紙上作品展覧会」における位相と展開（九）——

熊 木 哲

前稿「戦時下における児童文化」について（その八）（大妻女子大学紀要・文系」第三十五号、二〇〇三・三）では、「東日小学生新聞」の「紙上作品展覧会」における位相と展開に関して、昭和十四年（一九三九）の第四四半期（十月～十二月）を検討してきた。

昭和十四年第四四半期の検討対象である日曜日は十月一日から十二月二十四日までの十三回。日曜日に掲載された「紙上作品展覧会」（以下、「欄」）の設定は二回。「欄」の見出しは二回とも「紙上作品展覧会」。なお、十四年第一、第二、第三四半期における「欄」の設定は、対象とする日曜日が共に十三回であり、第一及び第二四半期は共に二回、第三四半期は四回であった。

以下、「前稿」により、第四四半期に掲載された作品をジャンル別に概括しておく。

昭和十四年第四四半期の検討対象は、十月一日（日）から十二月三十日（土）までの、休刊日を除いた七八日分。この内、十月三十一日（火、第九六八号）は、国会図書館所蔵のマイクロフィルムが〈欠〉。「綴方」の掲載数は六五作品。十四年第一四半期は七〇、第二四半期は六三、そして第三四半期には七八作品であった。

「詩」の掲載作品数七六作品。十四年第一四半期は九五、第二四半期は九〇、第三四半期は八〇作品であり、十四年度では最も掲載が少

なかったことになる。

「短歌」の掲載数は二二作品。十四年第一四半期は三七、第二四半期は四〇、第三四半期は二九作品。「詩」同様、十四年度では最も少ない掲載ということになる。

「俳句」の掲載数は七三作品。十四年第一四半期は九四、第二四半期も九四、第三四半期は七一作品。第三四半期の掲載状態に近かったといえる。

「書方」の掲載数は三六〇作品。十四年第一四半期は二二二、第二四半期は二二一、第三四半期は三〇〇作品。十四年度は各四半期毎に掲載数が増加し、この第四四半期が最も多い掲載数となった。

「図画」の掲載数は二七作品。十四年第一四半期は八二、第二四半期は七二、第三四半期は一〇〇作品。従って、第四四半期が十四年度で最も少ない掲載となった。第三四半期の反動であったか。

以上のように、直前の第三期に比べて、「書方」の増加の一方、「図画」が激減し、「詩」「俳句」がほぼ同水準、「綴方」「短歌」に減少が見られたということになる。

以下、十四年度の掲載状態をまとめておく。

第四四半期の「綴方」は第二四半期の六三に次いで少なく、「詩」は第一四半期の九五から次第に減少し、第四四半期に七六と最も少な

くなくなった。

「短歌」は、ジャンルの中で掲載数が最も少なく、第二四半期の四〇を最高にこの第四四半期では二一と最も少なくなった。

「俳句」では、第一、二四半期が共に九四であり、第四四半期は第三四半期の七一とほぼ同様の七三であり、この年の前半期に対し後半期は減少傾向にあった。

「書方」は第一四半期から次第に増加し第四半期で最大となった。

「図画」は第三四半期の一〇〇を最高に、第四では二七と激減し、ジャンルの中では掲載数にバラつきがみられた。

第四四半期に掲載された「綴方」は六五作品であり、この第四四半期であっても、第三四半期同様、児童の日常生活にある身辺での出来事と内容とする作品が多い。「戦時下」色を内容にもつのは十四作品であるが、これも第三四半期同様、掲載された作品の作者である児童の肉親の出征、戦死といった内容は見えないものの、児童にとって日常生活における「戦時下」が、いわば生活化されていたといえようか。

「詩」七六作品のうち、「戦時下」色が見える作品は一一。「綴方」同様、児童の日常生活における身辺での出来事などを内容とする作品の方が多いのである。しかし、満州に出征した兄の安否を気遣う「兄さん」という作品や身近で実施された演習の「えんしふ」という作品など、児童は、やはり「戦時下」に置かれていることから逃れることが出来ないといえよう。

「短歌」は、一二首のうち、六首に、「戦時下」色が現れていた。戦場の兄の安否を気遣い、新聞記事に胸騒ぎする児童がいる一方で、自らの命を「君」に捧げて惜しくないと作品化する児童が登場した。

「俳句」の掲載は七三句。内容に「戦時下」色が見える九作品のうち、四作品には戦場にいる父や兄が登場し、この期の「綴方」「詩」「短歌」に比べた場合、この「俳句」における投稿児童の「戦時下」色は明らかに濃厚であった。

「書方」の作品掲載数は、三六〇点。十四年度では最も多い掲載数。

作品の掲載数の増大は字句の字種の増加を、また、「聖戦へ民一億の體當り」（八点）、「建設へ大和心の勢揃ひ」（七点）などの時局柄に関連した標語の増大が確認出来た。

「図画」の掲載は二七点。大幅な掲載減となり、それ故なのかどうか、絵柄に時局は取り上げられなかった。風景画にしても静物画にしても児童の身辺にある、日常的な風景であり静物であった。

以下、本稿では、昭和十五年第一四半期（一月～三月）を検討する。引用に際しては、「書方」を除き旧字体を新字体に改め、原則としてルビは省略した。なお、在籍校名は掲載の記載に一部府県名を加えた。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示し、また、投稿者氏名は省略し、性別を記すにとどめたのは前稿同様。

一 昭和十五年第一四半期の展開

第一四半期、一、二、三月を併せて検討するが、第一四半期の検討対象である日曜日は一月七日から三月三十一日までの十三回。「欄」の設定は一回。「欄」の見出しは「紙上作品展覧会」。

「欄」の紙面構成は、全面掲載。なお、この他の日曜日について、掲載がなかった日曜日が三回、一作品のみの掲載が二回、三作品の掲載のみが一回。

さて、こうした「欄」の設定状況にあるので、本稿においても、以下では、「欄」及び「欄」が設定されなかった日曜日に加え、平日に掲載された作品も併せて検討する。

作品のジャンル別の掲載事情を確認しておく。

昭和十五年第一四半期の検討対象は、一月一日（月）から三月三十一日（日）までの、休刊日を除いた七七日分。この内、三月十六日（土、第一〇八四号）、三月二十三日（土、第一〇九〇号）は、国会図書館所蔵のマイクロフィルムが〈欠〉。従って、七五日分を検討した。掲載状態は、通常の休刊日は月曜であるが、一月一日は元旦につき

発行、二日、三日を休刊。その他は、火曜日から掲載のない日曜日を除き、「綴方」「詩」「短歌」「俳句」「書方」「図画」の総てか、或いは、その一部が掲載されていたことはこれまでと同様。

「綴方」の掲載数は六二作品。直前期昭和十四年第四四半期が六五作品であり、ほぼ同様の掲載であった。

「詩」の掲載作品数八四作品。十四年第四四半期が七六作品であつたから増加したことになる。

「短歌」の掲載数は六〇作品。十四年第四四半期が二一作品であつたから、大幅増。

「俳句」の掲載数は九八作品。十四年第四四半期が七三作品であつたから、これも大幅増といえよう。

「書方」の掲載数は二七七作品。十四年第四四半期が三六〇作品であつたから、直前期に比べると激減といえるが、掲載数からは少ない。

「図画」の掲載数は八一作品。十四年第四四半期が二七作品であり、これも大幅に増加。

以上のように、直前十四年第四四半期に比べて、「綴方」がほぼ同様、「書方」の減少のほか、「詩」「短歌」「俳句」「図画」が増加したことになる。

二 昭和十五年第一四半期における「綴方」

「綴方」の作品掲載数は、六二作品。前年の昭和十四年第一四半期は七〇、第二四半期が六三、第三四半期が七八、第四四半期が六五作品であり、六二作品の掲載は、十四年第二四半期とほぼ同様ということになる。

掲載された六二作品のうち、作品内容に時局柄或は「戦時下」色の見えるのは次の一三作品。因みに、十四年第一四半期では七〇作品中八、第二四半期では六三作品中一四、第三四半期では七八作品中八作

品、第四四半期では六五作品中一四作品であつた。これもほぼ第二四半期と同様の位相となつているといえよう。

「僕の貯金」

（茨城県塩田第二校六年男子、一月十二日・金、第一〇二九号）

「元旦」

（山梨県駒城校高一男子、一月十八日・木、第一〇三四号）

「父の帰還」

（茨城県女子師範附属六年男子、一月二十日・土、第一〇三六号）

「物価騰貴」（東京市明正校六年男子、一月二十五日・木、第一〇四〇号）

「オンシノタバコ」

（北海道磯分内校一年男子、一月二十八日・日、第一〇四三号）

「ゑはがき」

（静岡県瀬戸谷校三年男子、一月三十一日・水、第一〇四五号）

「貯蓄債券」

（神奈川県横浜市吉田校四年男子、二月二十五日・日、第一〇六七号）

「畑ほり」（山梨県駒城校高一女子、二月二十八日・水、第一〇六九号）

「大火災の思出」（静岡県森下校五年男子、三月八日・金、第一〇七七号）

「兄さん」（茨城県日立第三校三年男子、三月九日・土、第一〇七八号）

「鳩」（山梨県駒城校高一男子、三月十二日・火、第一〇八〇号）

「兵隊送り」

（神奈川県横浜市保土ヶ谷校五年女子、三月十七日・日、第一〇八五号）

「けんくわ」

（神奈川県茅ヶ崎第二校五年女子、三月二十六日・火、第一〇九二号）

「僕の貯金」（茨城県塩田第二校六年男子、一月十二日）は、「僕は貯金を六円七十銭つんだ」というもの。前年の十二月二十八日（第一〇一八号）には、同じ茨城県塩田第二校の五年男子の作品「僕の貯金」が掲載されていた。前稿でも触れたが、十四年十二月二十三日の「東日小学生新聞」には「貯蓄報国少国民大会」が「愛国児童協会主催、

大蔵省後援」により「二十一日午後一時から日比谷公園旧音楽堂前の広場で催され」たことが報じられていた。貯金は「銃後国民に課せられた報国の任務」（『週報』第八十一号、昭和十三年五月四日）であり、「貯蓄報国」が児童にまで求められ、学校単位で実施されていたことの反映がこれらの作品ということになる。

「貯蓄債券」（神奈川県横浜市吉田校四年男子、二月二十五日）の冒頭は次のような一節。

日本は今非常時だ。僕はお正月にもらったお金やお小づかひを貯金してゐる。今に五円ぐらゐになつたら、貯蓄債券を買ふつもりだ。（中略）

子供のくせに債券を買ふかと思ふ方もあるであらうが、今日、先生が「お国の為になる事だから、子供でも買つてもをかしくない」とおつしやつたからだ。

一見、児童の自発的な「貯蓄報国」のように見えようが、そこに「先生」の関わりが明らかであろう。

「元旦」（山梨県駒城校高一男子、一月十八日）は、「紀元二千六百年の輝かしい初日の出を拝む。新しいつるべを下げて若水を汲み、身体を清めて氏神様にお詣りに行つた」というもの。

「紀元二千六百年」の元旦の奉祝について「内閣」が決めた内容が「東日小学生新聞」に掲載されたのは、昭和十四年十月三日（火、第九四四号）。「輝く二千六百年 来年の元日を寿ぐ 意義深い行事きまる」との見出しのもと、次のような内容であった。

まづ全国民は、紀元二千六百年の元旦を迎へて、聖寿の無窮を寿ぎ、皇室の御聖徳を仰ぎ奉ると同時に、新東亜建設に進む強い覚悟を以て、各家庭では早朝に神社に参拝すること、午前九時を「国民奉祝の時間」としてサイレン又は鐘を合図に、全国民が

一斉に宮城遥拝と万歳を奉唱すること、また各役所、学校、会社、工場では適当な場所で行う奉拝式、或は祝賀式を行ひ、国歌のほかに「紀元二千六百年頌歌」を斉唱すること、また外国にある公使館、領事館、日本人会でも奉拝式と万歳斉唱を行つて、二千六百年の国史の跡を偲ぶこと、なほ当日は一月の興亜奉公日に当るので、新年奉祝のほか、特に松飾や年賀状、年始などお正月の行事を質素にすること。

つまり、正月の習俗ともいえた「元旦」早朝の氏神様参拝には、「聖寿の無窮を寿ぎ、皇室の御聖徳を仰ぎ奉ると同時に、新東亜建設に進む強い覚悟」を求められたということになる。

「東日小学生新聞」は、昭和十五年一月一日号の付録に「紀元二千六百年記念国史カレンダー」をつけ、二月を「紀元元年」「神武天皇、橿原宮に即位し給ふ」「二月一日（今の二月十一日にあたります）」と記した。

また、一月六日（土、第一〇二四号）では、一面において、「光満ちる八紘台」の見出しに四段抜きの写真に掲げた。「緑したる宮崎市の八紘台にそそり立つ皇紀二千六百年記念の『八紘之基柱』は、今この輝く新春を迎へて、着々と完成に近づいています」に始まる記事であり、昭和十五年は「紀元二千六百年」として、特別な年とされ、各種の奉祝事業・行事が計画された。

奉祝行事は、「東日小学生新聞」昭和十五年一月二十八日（日、第一〇四三号）二面などに掲載され、「三千万参加の建国記念式典」（二月二日・金、第一〇四七号）に、児童は、「学童学芸会」や「武道大会」への参加が要請された。

こうした、いわば公式行事のほかに、「各地小学校の二千六百年記念事業」（二月二日前出）が計画実施された。

正しい遥拝を行うために、伊勢大神宮と宮城の方向を示す「方向標」を作ったのは群馬県伊勢崎町北校。神奈川県福浦校では西南戦争から

満洲事変までの「戦没英霊」の追悼集の出版を計画。奉祝行事と合わせて児童の体位向上を目指したのは、弘前市第一大成校の洪柿栽培であり、同第二大成校では、物資増産の国策に沿った綿の栽培を行うことが記事に見える。

児童にとって、「紀元二千六百年」は、その奉祝行事への参加が否応なく要請され、「神国日本」「天皇の国日本」の「少国民」であることが求められていったということであろう。

「父の帰還」(茨城県女子師範附属校六年男子、一月二十日)は、文字通り、兵隊に行っていた父が帰ってきたというもの。三年ぶりの帰還は、「マラリヤのやうせいで残される」こととなり、兵営での面会は果たしていたものの、今日、やっと家に帰ってきた。「僕は三年ぶりに父の洋服姿を見た。さうしていつまでもく見入つて居た」。突然の帰還に驚いた分だけ、喜びは大きい。

「畑ほり」(山梨県駒城校高一女子、二月二十八日)での父は、「去年の今頃は支那で戦つてゐたのに、今日は畑ほりか」と、「感慨ふかげに」いう。妻子とともに農作業に励む父の言葉を聞きながら、今年から「畑ほり」を手伝う作者には、父母との仕事に心が弾む。

「鳩」(山梨県駒城校高一男子、三月十二日)の冒頭は、次のような一節。

東京から、兄がノモンハンの激戦に参加した凱旋のおみやげとして、鳩の雄雌をもらつてきた。

一ヶ月ほど面倒をみて、なれた頃と判断した兄が放鳥したら、帰ってこなくなってしまう、泣きたいような気持ちでいると、見なれた鳩が屋根に止まっていた。しかし、その鳩は一向巢に入らず、家の鳩が心配で「落ちついて今日は勉強も出来ない」という内容。

少年の鳩に対する愛着が伝わってくる作品であるが、ここで取り上げるのは、「父の帰還」「畑ほり」「鳩」が、戦場に行っていた父や兄

が家に帰ってきたという「戦時下」の作品であるからである。

「東日小学生新聞」昭和十五年一月二十日(土、第一〇三六号)二面には、三段にわたる写真のもと、「我らの勇士帰る」の記事が掲載された。

呉淞(ワズ)クリークや盧山の山岳戦で武勲を重ねた青海川、神田、清水、寺生、山川、佐佐木の各部隊が、○日○○に上陸しました。畏くも秩父宮さまも、お出迎へ遊ばされ、帰還を聞いた小学生が、二重橋前に日の丸を手に群がりました。

いわゆる「内地」に帰還した兵士が、そのまま自宅に帰れるわけではない。一時休暇なのか除隊なのかは、作品からはわからないが、いずれにしても父や兄が自宅に帰ってきたという内容である。

「鳩」での兄の帰還はノモンハンからであったという。昭和十四年五月十一日に端を発した「ノモンハン事件」は、九月十五日停戦協定が結ばれ、終結した。

「兄がノモンハンの激戦に参加した」と作品の一節にあるが、当時、「ノモンハン事件」についての詳しい説明はなかったものの、その「激戦」ぶりは、戦死者の多さから次第に国民の知る所となったようである。

当時の公式出版物による「激戦」さは、「内閣情報局」発行の「週報」第一五四号(昭和十四年九月二十七日発行)に掲載された、陸軍省情報部「ノモンハン事件の終末」によって窺われる。

わが軍は寡兵を以つて優勢なる敵に当り、彼我の戦闘激烈を極めた。襲来する敵の戦車群の波に対しわが対戦車砲は砲身も裂けるばかりの猛射撃を浴せ、尚溢出せる戦車に対しては肉迫攻撃を敢行し文字通り死力を尽して奮戦した。

ソ連の戦車群に対して、肉弾戦を挑んだということであり、多くの将兵が「護国の神」と化した。「今次の戦闘は文字通りの激戦で敵に大打撃を与へたるは勿論であるが、我が軍亦山県、森田、伊勢部隊長以下相当の死傷をだしたのである。その詳細なる戦果に就いては目下調査中である」とされた。

陸軍省情報部は、「文字通りの激戦」とし、「あらゆる困苦欠乏に堪へて奮戦せるわが将兵の辛苦は真に言語に絶するものがある」と記した。「鳩」の兄さんは、そうした「激戦」からの帰還であった

一方、「東日小学生新聞」には、「皇軍の鋭い急進撃に英徳忽ちに陥落」(二月四日・金、第一〇二三号)、「酷寒をついて掃蕩 北、中、南支に皇軍の活躍」(一月二十七日・土、第一〇四二号)、「南と北に堂々と感激の入城式 南寧と五原に日章旗 銀世界の臨河も占領」(二月六日・火、第一〇五〇号)など、戦果誇示の記事が掲載されている。帰還する兵士がいる一方で、大陸の戦場にいる兵士がいることを内容とするのが、「オンシノタバコ」(北海道磯分内校一年男子、一月二十八日)。

ケフ、センチカラ、小サイコツツミガ トドキマシタ。(中略)
中カラ デテキタノハ、キクノゴモンノツイタ タバコ デシタ。
(中略) ヘイタイサンガ ノマナイデ、オクツテクレタ コトヲ
カンガヘルト、ナントナク ソノタバコニ アタマガ サガリマ
シタ。スルト オカアサンガ ホトケサマニ ソナヘテ、ウチデ
ユウデ ヘイタイサンノ マゴコロニ オイノリ シマシタ。

内容からは、慰問袋への返礼として戦地から「恩賜のたばこ」が届けられたということであろうが、一年生が「ソノタバコニ アタマガ サガリマシタ」と記す時、この作品の背後にある大人の存在は無視できない。

「ゑはがき」(静岡県瀬戸谷校三年男子、一月三十一日)では、戦場

に居るのは「しんるゐの兄さん」。「戦争で支那へ行つてゐるしんるゐの兄さん」が、「軍事ゆうびん」で「ゑはがき」を送ってくれたという内容。「へいたいさんがむせんでんしんをしたり、大砲を高い所へ引上げたり、とつげきをしててつぼうをうつたりしてゐる勇ましいゑはがき」。戦場が「絵柄」として「内地」の児童のもとに届けられたということである。

「兄さん」(茨城県日立第三校三年男子、三月九日)では、兄が「入営」中である。

僕のうちでは、もと兄さんが三人だったが、今では一人です。小さい兄さんは、去年の一月四日に入営してしまつた。大きい兄さんは、なくなつてしまつた。今では中の兄さんに、かはいがつてもらつて居る。その兄さんは兵隊に行つて来たのだ。

「大きい兄さん」の亡くなった理由は明らかではない。「中の兄さん」が何時兵隊から帰ってきたかも明らかではない。明らかなのは、ただ、三人の兄のうち、一人が亡くなり、一人が兵隊から帰り、一人が入営していることである。

帰還のニュースがある一方で、入営があるということであり、「兵隊送り」(神奈川県横浜市保土ヶ谷校五年女子、三月十七日)は、文字通り、出征兵士の見送りを内容とする。

利ちやんの顔は陽に焼けて、見違えるほど黒かつた。私達はなほ「万歳／＼」と叫び続けた。利ちやんの姿はだん／＼小さくなつていくが、まだ「うわー」と叫び続けてゐる。外の兵隊さんみんな戦地へ行つて、御国の為に一身を捧げる覚悟であろう。

知り合いの「利ちやん」から、近くの鉄道を移動するとの知らせが届いたということであろうか。「線路の柵によりすがつて」やつて来

る列車を待っていた。「利ちゃん」の入営から時が経っているのであるのか、「顔は陽に焼けて、見違えるほど黒かった」。訓練焼けとでもいうのであろう。宿営地から戦地への移動を見送ったということである。

「大火災の思出」(静岡市森下校五年男子、三月八日)は、昭和十五年一月十五日の静岡大火災が内容。このとき、「静岡市空前の大火七千戸全焼、中心地全滅」(「東日小学生新聞」一月十七日・水、第一〇三三号)であったという。

僕が外へ出て見ると、火薬庫を大勢の兵隊さんがまもつてゐる。そのうちに弾丸のはいつた箱を、リヤカーにのせたり、肩にかついで浜のほうへ行つた。中には二人で一つを持つてくる兵隊さんもあった。後から後から続いてくる。

「綴方」の目論見が、大火災にあることはいうまでもないが、ここでの検討は、「内地」の宿営地にも大勢の「兵隊さん」がおり、軍隊の「火薬庫」が児童のすぐそばにあることが日常であったということである。

「物価騰貴」(東京市明正校六年男子、一月二十日)は「今は戦時だから無駄遣をつつしみ、なるたけ物を大切にしていゐる」というもの。

「けんくわ」(神奈川県茅ヶ崎第二校五年女子、三月二十六日)には、「私はさつきから漢口陥落と言う漢字が、頭の先まで浮かんでゐて、どうしても思ひだせないで、新聞を見たりしてゐました」との一節がある。

「物価騰貴」も「けんくわ」も、いうまでもなく「戦時」に生きる児童の置かれた状況であった。

以上、「綴方」について、内容的に時局或は「戦時下」色が見える一三作品を検討してきた。この第一四半期に掲載された「綴方」六二作品は、直前の四半期である昭和十四年第四四半期同様、児童の日常

生活にある身近での出来事を内容とする作品が多い。

一三作品には、戦地から帰還した父を迎えたり、兵隊から帰った父親が登場していた。また、肉親の戦死といった内容も見えなかった。しかし、兄が入営中であつたり、戦地に赴く知り合いを見送つたり、貯蓄を心がけ貯蓄債券の購入を考えている児童の日常は、いうまでもなく「戦時下」なのである。

三 昭和十五年第一四半期における「詩」「短歌」「俳句」

「詩」の作品掲載数は、八四作品。前年の十四年度では、第一四半期九五、第二四半期九〇、第三四半期八〇、第四四半期が七六作品。十四年の第一、第二四半期には及ばないものの、第三、第四四半期の掲載数を超えていた。

掲載された八四作品のうち、内容に時局或は「戦時下」色が見えるのは次の一〇作品。因みに、第一四半期は九五作品のうち一五作品、第二四半期は九〇作品のうち四作品、第三四半期は八〇作品のうち五作品、第四四半期は七六作品のうち一一作品であり、直前の第四四半期に比べると、その比率は下がったということになる。

「お正月」(静岡県瀬戸谷校五年女子、一月四日・木、第一〇二二号)
「二千六百年」(神奈川県横浜市神奈川校四年女子、一月五日・金、第一〇二三号)

「元旦」(神奈川県横浜市神奈川校四年女子、一月五日・金、第一〇二三号)
「元旦」(東京市麹町校三年女子、同前)

「元旦」(神奈川県高峰校三年女子、一月六日・土、第一〇二四号)
「へいたいさん」

「夜」(茨城県日立第四校三年男子、一月十六日・火、第一〇三三二号)
「貯金箱」(山梨県増穂校六年女子、一月二十四日・水、第一〇三九号)

「貯金箱」(千葉県船橋市八栄校六年女子、一月二十五日・木、第一〇四〇号)

「飛行機」(山梨県駒城校高一女子、一月二十六日・金、第一〇四一号)
「丸坊主になつた叔父さん」

(東京市中延校六年女子、二月一日・木、第一〇四六号)
「兄さん」(千葉県船橋市八栄校六年女子、二月七日・水、第一〇五一号)

「お正月」(静岡県瀬戸谷校五年女子、一月四日)は、「うれしい楽しいお正月、指折りかぞへてまいました」に始まるが、第二連後半には「紀元も二千六百年栄ゆる御代はおめでたい」の一節が見える。

「二千六百年」(神奈川県横浜市神奈川校四年女子、一月五日)は、次のような作品。

興亜の風に

さそはれて、

飛んで来たのか

お正月。

暁の空

ほの／＼と、

紀元は二千六百年

我等は

大日本の少国民、

初日の下に

みんなして

今日のよき日を

祝ひませう。

父さん母さん

お目でたう、

先生みなさん

お目でたう、

兵隊さんよ

お目でたう。

「元日」(東京市麹町校三年女子、一月五日)には、「紀元二千六百年のうれしい元日だ」「みんな揃つて神様におまゐりませう 祈りませう」という一節がある。

また、「元旦」(神奈川県高峰校三年女子、一月六日)は、「まことにまつた紀元二千六百年の元旦が、ぱつと空一ぱいにひろがつた」の一節からはじまる。

以上、「お正月」「二千六百年」「元日」「元旦」の四作品は、一月四日から六日の間に掲載され、明らかに「紀元二千六百年」を寿ぐ内容となっている。

一億同胞が喜びに輝く、紀元二千六百年のお正月が、目の前に迫つて来ました。皆さんは一生忘れることの出来ない、有難い新春を迎へるにあたつて、いろ／＼な計画や希望に燃えてゐることでせう。その心持を作品の上にあらはして、お正月の「東小」を飾ってください。

右は、「東日小学生新聞」昭和十四年十二月十四日(木、第一〇〇六号二面)に掲載された「お正月の作品を募る」。この募集広告では、「題」は「別にきめませんが、必ず紀元二千六百年のお正月に関係のあるもの」とされ、「綴方、詩、童謡、俳句、短歌、書方、図画」が募集された。

また、「よく出来た作品を、お正月四日付の『東小』から順次掲載します」とされ、「詩」が、四日から六日の間に掲載されたのは、こうした事情があったということになる。なお、「綴方」では一月十八日掲載の「元旦」に「紀元二千六百年の輝かしい初日の出を拝む」の一節があることは前述したが、この作品も「お正月の作品を募る」に応募したものと推察される。

「へいたいさん」(茨城県日立第四校三年男子、一月十六日)は、次のような作品。

みんな旗をふつた。

ぼくもふつた。へいたいさんはバスにのつてきた。

もうぼくはいきみたつた。

へいたいさんはこつちをむいて
につこりわらつた。

うゑきさんは

「あれ目がない、かはいさうだねえ」といつた。

となりゐたへいたいさんは、

わらひ出した。

出征の見送りなのだろうか、それとも小学校に「へいたいさん」がやってきたのだろうか。情景の判断が俄にはつけにくい。内容的にも「目がない、かわいさうだねえ」からは、傷病兵のようでもあるが、隣の「へいたいさん」はわらひ出した」となると、これまた、事情がつかめない。

「夜」(山梨県増穂校六年女子、一月二十四日)に、「湯へ入る時みたオリオン星が、高くのぼつてゐる。戦地でもあの星を見てゐるだらうか。兵隊さんは寒い野原で今日も又、戦を続けてゐるだらう」との一節がある。

自分の見ている月を戦地で肉親が見ているだろうという作品はこれまでもあったが、この作品も「オリオン星」を戦地への梯とし、「寒い野原」での戦闘を思いやる。

「貯金箱」(千葉県船橋市八栄校六年女子、一月二十五日)の前半は、次のような作品。

六年生の貯金箱、

毎日々々入れて居る。

私はたつた五銭だ、

今度たまつたら

また入れませう。

「綴方」作品「僕の貯金」の検討で、「貯蓄報国」の実態が、児童個人の貯金と学校単位での実践が求められていたことを触れたが、この「貯金箱」は、個人の思惑を超えた集団でのいわば強制的な「報国」の実践が求められたといえよう。「私はたつた五銭だ」の心持にはある種の引け目が生じたということであろう。

こうした貯金は、次のような記事となつて「東日小学生新聞」(十五年一月九日・火、第一〇二六号)に掲載されることになる。

学級貯金で恤兵金 茨城のお友達

“東小”のお友達の一人茨城県下吉影校四年生小田あきさんから、かはい、赤心を籠めたお手紙を添へて二円三十銭の恤兵金がわが社に届きました。あきさんの組二十九名全部は今年兵隊さんにおなりになる元気な岩松先生のお世話で、去年の四月から毎週金曜日に一人一銭以上を貯金してゐます。学期末には先生から御褒美に利子をつけていたゞき、郵便貯金帳に積みます。それが全部で三十九円二銭になつたのです。その尊いお金の一部を送つて来たのでした。感心ですね。

ここには、「学級貯金」が、教師の指導のもと「貯蓄報国」として実践されている様相が見て取れる。「一銭以上」というが、「私はたつた五銭だ」と感じる児童もいる。「学級貯金」は、心理的な圧迫を伴う競争的な「貯蓄報国」であり、ここでは競争が強制と同義となつていゝといえよう。

「飛行機」(山梨県駒城校高一女子、一月二十六日)は、次のような

作品。

あつ飛行機だ、
教室の窓から見ると
四台飛んでゆく。

どの窓にも、頭がずうつと
ならんだ。

先生も玄関に出る、
がや／＼さわぐ、

生徒の声にまじつて

先生の太い声も
聞えてくる。

戦闘機が編隊で飛来した光景として、「戦時下」の作品とした。この小学校の所在地では飛行機がやってくることは珍しいことであったか。児童のみならず先生の様子も興奮気味のようだ。「我が荒鷲」も「空の勇者」の語句もない、ただ飛行機の編隊に歓声を上げる児童の様子が伝わってくる作品であるが、やはり時局柄の作品というべきであらう。

「丸坊主になつた叔父さん」（東京市中延校六年女子、二月一日）は、「教育召集を受けた叔父さん」が入営のために丸坊主になり、「若かへつたやうだ」という内容で、「何日後には、帝国軍人になる。いばつてやりたい気持ちだ」と結ぶ。「叔父さん」は、第一補充兵で、訓練教育を受けるための召集であるが、姪にとっては、叔父さんが「帝国軍人」になるということに、大いなる誇りを感じているということか。それまでは、他所の「帝国軍人」を羨んでいたのか、と読み取るのは僻目に過ぎようか。

「兄さん」（千葉県船橋市八栄校六年女子、二月七日）は、次のような作品。

始めて新聞に出た兄さん、
にこ／＼顔で笑つてゐる、
ひげを生やして、
にこ／＼顔で笑つてゐる。
何が嬉しいか、
戦地の兄さん。

新聞に、出征した「兄さん」の写真が載った。新聞で自分の兄の姿を見られるとは想像もしていなかったことであらう。しかも、その兄は笑顔だ。写真の説明は付いていなかったのだろうか。

直前期、昭和十四年第四半期の検討において、同じ在籍校学年の女子の作品に「兄さん」という詩があり、そこでは家に残っている写真を見ながら「満州で何をしてるだらうな。何の便りも未だ来ない」と心配していることを確認した。

この二月七日掲載の「兄さん」は、何はともあれ、元氣そうで無事な様子を確認できて、ひと安心といったところであらう。

同じ在籍校、同じ学年で、兄と共に戦場に居る。児童にとっての「戦時下」は確実にその密度を濃くしているということである。

以上、「詩」について、時局柄或は「戦時下」色の見える一〇作品を検討してきた。

この第一四半期に掲載された「詩」は八四作品であり、「綴方」同様、児童の日常生活における身近での出来事などを内容とする作品の方が多いのである。
一例を挙げてみる。

鐘がなつた、
みんな並んでゐる。
かけて行つて

並んだ。

みんなが顔を見た、
はづかしかった。

頭にあつた

ビンドメを

下をむきながら

取つた。

「貯金箱」(前出)と同日に掲載された、「会礼」(栃木県赤麻校四年女子)という作品である。時局柄、ビンドメなんぞをしようと、非難の眼差しを受けて「はづかしかった」ということではあるまい。四年生がお気に入りのビンドメをして学校にいったところ、皆に注目されて「はづかしかった」ということであり、ちょっとしたおしゃれ心を持った少女のしまったという気持ちが伝わってくる。

しかし、児童にとって「戦時下」が身近にあったことも確かなことであつた。毎日、学級貯金する六年生、「叔父さん」が教育召集をうけた六年生、新聞の写真で戦場にいる兄さんを見つけた六年生。この、新聞の写真で兄さんを見つけた作者と同級生の兄も戦場にいる。「戦時下」は、ひとことではないことが、これら「詩」作品から窺うことができる。

「短歌」を検討する。

「短歌」の作品掲載数は、六〇首。前年十四年は、第一四半期が三九首、第二四半期四〇首、第三四半期二九首、第四四半期二一首であり、この十五年第一四半期の掲載数は群を抜いていることになる。

掲載された六〇首のうち、作品内容に、時局柄或は「戦時下」色を含むものは、次の二三首。因みに、十四年第一四半期では三七首のうち一〇首、第二四半期では四〇首のうち一二首、第三四半期では二九首のうち八首、第四四半期では二一首のうち六首であつた。

戦場の兄も銃後の私も興亜の初日今ぞ拝せり

(北海道昭和校高二男子、一月四日・木、第一〇二二号)
新しき年の初日のさし出でて紀元は遠し二千六百

(山形県地見興屋校五年女子、同前)
聖戦下やがて待たれる正月を希望に満ちて指を折るなり

(群馬県太田町校高一男子、同前)
神代から富士と並んで変わりなく紀元は輝く二千六百

(栃木県葛生校高一男子、一月五日・金、第一〇二三号)
君が為散りて帰らぬ丈夫は今ぞ歴史をかへり見るらん

(千葉県船橋市九日市校高二男子、同前)
佳きけふの社の御前にぬかづきて祈るは一つ武運長久

(北海道花咲校高一男子、同前)
そのかみの神代の帝をしのびつゝ輝く皇紀を祝ふけふかな

(秋田県六郷校六年女子、同前)
新年の晴渡りたる大空に奉祝の飛行機音高く飛ぶ

(茨城県日立第二校六年女子、一月十二日・金、第一〇二九号)
一億が希望にもえる初春や君に尽さん秋は至りぬ

(北海道真龍校高一女子、同前)
をち上の写真に雑煮供へつゝはるかに武運祈る朝かな

(新潟県聖龍校六年男子、同前)
君が代と一しよにあがる日の丸に太陽の光美しく映ゆ

(宮城県細倉校六年男子、一月十六日・火、第一〇三二号)
お茶休み戦地の話いでにけり近所の家の人の様子も

(栃木県柏尾第一校高一男子、一月三十一日・水、第一〇四五号)
ひらくと旗に埋まる駅頭に兄は行くなり大君の為

(樺太敷香第三校五年男子、二月一日・木、第一〇四六号)
大空にはねひるがへし今練習機横転をしぬ

(山梨県増穂校六年女子、二月十日・土、第一〇五四号)

出征家族慰問の方達を感謝しつつも見送る一家

(山梨県増穂校六年女子、二月十五日・木、第一〇五八号)
奉仕刈り終へて楽しい鎌の刃に入日の光美しく映ゆ

(栃木県柏尾第一校高一女子、同前)
日の丸の旗勇ましく生き生きと青空高くひるがへるかな

(福島県木幡校五年男子、同前)
大君の御楯となりて大陸へ船出する友いさぎよくあれ

(山形県金井校高一男子、二月十七日・土、第一〇六〇号)
馬征きし厩淋しく冬空の深処の風をききつゝ掃くも

(茨城県寺原校高一男子、同前)
雪降れど寒さにめけずとく起きて清き心を神に捧ぐる

(栃木県柏尾第一校高一女子、二月二十三日・金、第一〇六五号)
鹿島立ち出船の汽笛聞く度に神に祈りぬ武運強かれ

(北海道函館市の場校高一男子、三月十日・日、第一〇七九号)
我が兄の戦の庭に立行くをうれしくも想ふ悲しくも想ふ

(福島県新田町校高二男子、三月二十七日・水、第一〇九三号)
勝ち来よと出で征く兄をはげまし涙溢れて手固く握りぬ

(山梨県初鹿野校高二男子、三月三十日・土、第一〇九六号)

第一首「戦場の」、第二首「新しき」、第三首「聖戦下」、第四首「神代から」、第五首「君が為」、第六首「佳きけふの」、第七首「そのかみの」、第八首「新年の」、第九首「一億が」までの、合計九首の作品は、「詩」の検討でも触れたように、いずれも「お正月の作品を募る」に応募した「紀元二千六百年のお正月に係る」作品といえよう。

「紀元二千六百年のお正月に係る」作品といっても、内容は、ただ単に「皇紀」の奉祝にとどまらない。第一首の「戦場の兄も銃後の私も」のように、身内を戦場に置いている「銃後の私」とっては「興亜の初日」に祈るのは兄の無事であろう。

身内の無事を念ずるのは、第一〇首「をち上の」の作品も同様。「をち上の写真に」影膳を備えるのが日課なのであろうが、お正月なので雑煮を供えるというもの。

第一一首「君が代と」の作品は、君が代の演奏と共に国旗が掲揚される光景を詠んだもの。第一七首「日の丸の」は、掲揚後青空に日の丸の旗が翻るという光景。「生き生きと」は、風か。

第二二首「お茶休み戦地の話いでにけり近所の家の人の様子も」では、戦地にいる父や兄の消息と近所から出征した人の消息も語られたということなのであろうか。仕事の「お茶休み」。休憩の時間は、出征中の身内の心配に心は休まらない。

第三首「ひらひらと」、第二三首「我が兄の」、第二三首「勝ち来よと」の三作品は、いずれも「兄」が出征する際の光景が内容。「我が兄の」の、出征する兄を「うれしくも想ふ悲しくも想ふ」とは、真情か。出征し人並みになることに「うれしく」は思うものの、真情は、「悲しく」であり、「勝ち来よ」の「涙溢れて」であろう。

第四首「大空に」では、練習機が大空を横転して見せる。少女の目に映る羽ひるがえしひるがえし飛ぶ練習機。ここには切羽詰まった緊迫感はない。しかし、練習機の乗員は、やがて戦闘機を操り、空で戦うために、今、横転を繰り返しているということになる。

第六首「奉仕刈り」は、出征家族宅での勤労奉仕。作業を終えて見送り、見送られるのが第一五首「出征」の作品ということになる。

第一八首「大君の」は、満蒙開拓青少年義勇軍となって「大陸へ船出する友」の見送るか。第一三首「ひらひらと」でも、「大君の為」に出征した。第一八首では、少年も「大君の御楯」として、満洲へ向かった。「御楯」は象徴ではなく、隠された本音であったが、作者の児童は、満蒙開拓の狙いをどこまで理解をして、この用語を使ったのであろうか。

第一九首「馬征きし」は、飼馬が軍馬として徴用された後の厩。朝に晩に、世話をした愛馬が出征し「淋しく」なるのは当然。愛馬を

召し上げられて、少年の心を「冬空の深処の風」が吹き抜けていく。

第二〇首「雪降れど」は、朝一番の神社への参拝。武運長久の祈願だが、「興亜奉公日」のことか。前稿でも触れたが、「興亜奉公日」は、前年、昭和十四年九月一日を第一回とし、毎月一日に実施することが決定され、この日に全国民が行うことは、国民精神総動員委員会が決定した「国民生活綱要ノ趣旨ノ遵守励行」であり、そこには「報恩感謝」の具体例として、早朝神社に参拝し武運長久祈願を行うことが挙げられていた（週報）昭和十四年八月十六日、第一四八号）。神社に参拝し武運長久を祈ることは日常的に要請されていたことではあるが、「雪降れど寒さにめけずとく起きて」には、「興亜奉公日」に要請された早朝参拝が推測されよう。

第二一首「鹿島立ち」では、出征兵士を乗せた出船は、他の出船とは違った「汽笛」が鳴らされたということであろうか。「汽笛聞く度に」からは、出征兵を運ぶ出船が度々あったといえよう。

以上、時局柄或は「戦時下」色の現れた「短歌」二三首を検討したが、「紀元二千六百年」奉祝作品の募集に応じた作品には、節目の「紀元」に対する昂揚感が共通していた。また、兄の出征が三作品もあり、休憩時での肉親の消息を推し量り、出征家族への勤労奉仕もあった。「戦時下」が、益々、その密度を濃くしてきたのは「詩」作品と同様といえよう。

「俳句」を検討する。

「俳句」の作品掲載数は、九八句。前年、昭和十四年第一四半期が八八句、第二四半期九四句、第三四半期七一、第四四半期七三句であった。

掲載された九八句のうち、作品内容に時局柄或は「戦時下」色が現れているのは、次の一九句。因みに、十四年第一四半期では八八句のうち一句であり、第二四半期では九四句のうち七句、第三四半期では七一句のうち六句、第四四半期は七三句のうち九句であった。

聖戦下新春敵傍の空青し

（東京市渋谷区臨川校高一男子、一月四日・木、第一〇二二号）
戦地ではお正月から大勝利

兄思ふ心も戦地四方拝

（東京市蒲田区六郷第一校高一男子、一月五日・金、第一〇二三号）
一草刈るに鎌光り銃後なほ堅し

（静岡県興新校六年女子、一月六日・土、第一〇二四号）
年の暮白衣の勇士羽根をつく

（東京市足立区千寿校高一男子、同前）
八紘に御旗の匂ふ初日かな

（秋田県金浦校高一男子、一月十二日・金、第一〇二九号）
かしは手に皇国の栄えを祈りけり

（北海道岩内西校六年女子、同前）
新春にそよぐ日の丸出羽の富士

（山梨県上野原校六年男子、同前）
聖戦に心明るき四方拝

（新潟県南西海校六年男子、同前）
八紘に光あまねし初日影

（秋田県大竹校五年男子、一月十六日・火、第一〇三二号）
皇軍の意気を思はず初日の出

（北海道幌加内校六年男子、同前）
きら／＼と帰還兵士の肩の星

（静岡県富戸校高一男子、同前）
とり巻いて読むは戦地の便りかな

（静岡県気賀校五年女子、一月十九日・金、第一〇三五号）
軍事便兄の書初僕が見る

（山形県東郷校高一男子、一月二十日・土、第一〇三六号）

光輝ある年を迎ふる誇りかな

(新潟県五泉校高二男子、一月三十一日・水、第一〇四五号)
日やけした顔はいさをに輝けり

(東京市津久戸校四年女子、二月十七日・土、第一〇六〇号)
鍬の手を休めて送る軍用列車

(新潟県長岡市表町校六年女子、三月八日・金、第一〇七七号)
君が代が天まで響け紀元節

(新潟県長岡市表町校六年女子、三月二十七日・水、第一〇九三号)
戦場はなほ寒からう今朝の雪

(山形県白岩校高二男子、三月二十九日・金、第一〇九五号)

「詩」「短歌」の検討でも触れたように、「お正月の作品を募る」に応募した「紀元二千六百年のお正月に関係ある」作品と推測されるのは、第一句「聖戦下」、第五句「光輝ある」の二句と思われる。

第一句「畝傍」は、いうまでもなく橿原神宮であり、「紀元」の始まりであることは、「綴方」の項で触れておいた。

第五句「光輝ある年を迎ふる」は、将に「紀元二千六百年」を指している。

この他、第二句「戦地では」にしても、第三句「兄思ふ」にしても、投稿時期からは前年暮れであろうし、内容的にも「お正月の作品」であるが、「紀元二千六百年」奉祝作品とは限定できない。

こうしてみると「紀元二千六百年」奉祝作品は、「俳句」においては数が少なかったということになるが、その理由は、十七文字という作品形態に難しさがあったことであろうか。

内容が「お正月の作品」は、第二句以外にも見られる。第三句、第九句では「四方拜」、第六句「初日」、第八句「新春」、第一〇句「初日影」、第二十一句「初日の出」、第一四句「書初」などが正月の季語といえよう。なお、内容的に、時局柄或は「戦時下」色の見えない作品にも、「初日」「初日影」「元旦」などを季語とする作品は季節柄、多

い。

第四句「一草刈るに鎌光り銃後なほ堅し」は、七・五・七と変形。出征家族宅での勤勞奉仕であろうか。一草刈ることに光る鎌。銃後もがんばっているぞということであろう。

第五句「年の暮」は、傷病兵が羽根をついている光景。羽根つきが出来るまでに回復したということであろうか。

第七句「かしは手に」は、神社で「皇国の栄え」を祈るもの。「興亜奉公日」をはじめ、児童は神社での祈りを求められていたことは「詩」の項でも触れておいた。

第二句「きら／＼と」、第十六句「日やけした」は、共に「帰還兵」が内容。帰還兵の出迎えに動員されたときの作品か。「綴方」の項で検討したが、小学生は出征の見送りに、帰還の出迎えにと動員された。

第三句「とり巻いて」、第十四句「軍事便」では、肉親が、兄が戦地にいるということ、その消息は、銃後の家族にとって何よりも心待ちにしていたことであろう。

第七句「鍬の手を」の「軍用列車」は、出征兵が乗っているのだから。農作業の手を休めての見送りだ。

第十八句「君が代が」は、二月十一日の「紀元節」の奉祝行事に参加した作品。

第九句「戦場は」は、作者の住居地に降った雪から戦場の寒さを思いやった作品。

以上、「俳句」について、内容に時局柄或は「戦時下」色のみえる一九の作品を検討してきた。このうち、二作品では兄が出征して戦場におり、一作品には肉親が戦場にいた。一方、帰還兵を出迎えた作品が二句。出征であろうか、「軍用列車」を見送ったのが一作品。また、傷病兵を内容とした句が一作品。出征、戦場、帰還、傷病兵。「戦時下」の揃い踏みとはならなかったが、戦死を内容とする作品のなかったことが救われる思いである。

この第一四半期において、「俳句」は九八と多くの作品が掲載され、それに伴ってか、時局柄或は「戦時下」色のみえる作品も一九と多くなっていたが、それ以外の、児童の日常生活に取材した作品のほうが、いうまでもなく、圧倒的に多数であった。

てつびんの音聞く夜やつもる雪

(北海道室蘭市女子校四年、二月十日・土、第一〇五四号)

破れ風くやしげ顔で空にらむ

(東京市蒲田区蒲田校高一男子、同前)

春風にこぼれちらばる齒磨粉

(福島県三春校三年女子、三月三十日・土、第一〇九六号)

「てつびんの」の作者の年齢を考えると、お見事といったところであり、「破れ風」では「くやしげ顔」が生きている。「齒磨粉」を吹き散らす「春風」。朝の齒磨きが「春風」の季節になったということである。この第一四半期が一月から三月であり、掲載された作品も「初日の出」「雪」から「春風」と、この期の季節を内容とする作品が掲載されていたといえる。

四 昭和十五年第一四半期における「書方」「図画」と

この期の概括

「書方」を検討する。

「書方」の作品掲載数は、二七七点。前年、昭和十四年第一四半期が二二二点、第二四半期二二一点、第三四半期三〇〇点、第四四半期三六〇点であり、直前期の十四年第四四半期と比べると大幅に減少したことになる。しかし、絶対数からは二七七点は決して少ない掲載数ではない。

この二七七作品には、どのような時局柄或は「戦時下」色を反映したと考えられる字句が見られるか、以下にまとめてみる。

紀元二千六百年 (六〇点)

東亜一新の春 (六点)

建國の大理想 (四点)

皇恩自抱丹心 (一点)

皇軍大勝之春 (一点)

國民は皆戦士 (一点)

燦たり日章旗 (一点)

聖戦へ民一億の體當り (一点)

世界一日本 (一点)

忠靈顯彰 (一点)

日滿支親善 (一点)

護れ興亞の兵の家 (一点)

以上、一二種の字句のほか、「紀元二千六百年」に関連した字句が数作品みえる。

「紀元二千六百年」が六〇点もあるのは、「東日小学生新聞」が「書初め募集をし、その課題字句に指定したことによる。」

紀元二千六百年を迎えるのも、もうすぐです。この尊い年を迎へて、皆さんの中にはさぞかし精魂を、筆さきにこめて、いつまでも残る立派な書初めをする方も多いこととせう。東日小学生新聞では、この文字の上にはあらはれた建國魂を、広く皆さんから募集いたします。すが／＼しいお正月の朝に、身も心も清めて書いたお書初めを、奮ってお送り下さい。

昭和十四年十二月二十四日(日、第一〇一五号)の第一面に掲載さ

れ、締切りは十五年一月五日。応募総数二万三、七二一点で、入賞者六十名の作品が、一月二十八日（日、第一〇四三号）四、五面の見開きで掲載された。

「紀元二千六百年」に関連した字句としては、「建國二千六百年」（二点）、「二千六百年秋」（二点）、「二千六百年の新春」（一点）、「皇紀二千六百年」を含むもの（一点）などがある。

直前期、十四年第四四半期には、「聖戦へ民一億の體當り」が八点もあったのに、この第一四半期には一点のみの掲載となった。

「忠靈顯彰」も直前期には三点あったが、この第一四半期では一点に止まった。

直前期には掲載がなかった字句で、第一四半期に複数で掲載されたのは、「東亞一新の春」（六点）と「建國の大理想」（四点）。「東亞一新の春」は、六点のうち三点が山梨県増穂校六年の作品。学校での課題としての取り組みであったか。

また、直前期に七点も掲載された「建設へ大和心の勢揃ひ」は、第一四半期では全く掲載されなかった。

直前期と十五年第一四半期とでは、その掲載字句に大きな変化が見られたといえるが、迎えた年が「紀元二千六百年」という節目の年であったこと、また、掲載数の減少ということにも原因があったか。ただ、字種の変化に掲載数の減少がどのように影響を与えているかは定かではない。

二七七作品の字種は一一一種。直前期が三六〇作品で一五四種であったから、数字からは作品数の減少と字種の減少は比例しているといえそうである。

時局柄或は「戦時下」色を帯びた字句以外で、同じ字句の作品には、「姫路城天守閣」が一点、「千鳥破風亂舞」が一点、「大内山松の緑」が七点、「東海丸乗組員」が七点、「遺物國寶史蹟」が六点といったところ。

「姫路城天守閣」は、直前期七点だったから倍増したことになる。

一方、直前期に二〇点の掲載のあった「少年よ大志を抱け」はわずか二点と、一割になってしまっている。「遺物國寶史蹟」も直前期には一点であり、ほぼ半減した。

また、直前期に八点あった「秋ばれ波の音」は、この第一四半期には掲載がない。直前期は、十月から十二月であり、この「秋ばれ波の音」が季節の字句であったことからの掲載であったと推測される。

その意味で、この第一四半期の季節柄の字句としては「四方拝初日影」があり、五点の掲載があった。

以上、「書方」を検討してきた。直前期と比べて、作品の掲載数の減少は、字種の減少を、また、特定の字種が突出していたのは懸賞募集の発表のためであり、この期になっての新たな時局柄に関連した標語も登場した。一方、直前期とは字種の交代と減少もみられた。

この時期、直前の昭和十四年第四四半期と同様、時局や戦況にも大きな動きはなく、字種の交代に影響を与えた要因の特定には至っていない。

「図画」を検討する。

「図画」の作品掲載数は、八一点。昭和十四年第一四半期が八二点、第二四半期六九点、第三四半期一〇〇点、第四四半期は二七点であり、十五年第一四半期は激増し、前年の第三四半期には及ばないものの、第一四半期に肩を並べる掲載数となった。

掲載された八一点の作品において絵柄に時局柄或は「戦時下」を思わせるものは六点。因みに、前年第一四半期では八二点のうち六点、第二四半期では六九点のうち五点、第三四半期では一〇〇点のうち四点、第四四半期では二七点のうち〇点であった。これも前年の第一四半期の水準といえよう。

六点のうち、出征風景を絵柄とする作品が三点と半分を占めていることが特徴といえよう。

その他の時局柄或は「戦時下」を思わせる絵柄は、消火訓練のパケ

ツリレー、降下する戦闘機。

「綴方」 「詩」 「短歌」 「俳句」 「書方」 の検討でも触れたように、「お正月の作品を募る」に応募した「紀元二千六百年のお正月に関係ある」作品と推測されるが、足元に「二千六百年」と描かれた雪だるまの一点。

また、季節柄の暮れから正月風景を絵柄とするものに、餅つき、国旗を掲げようとしている姉弟、国旗のある広場での風揚げ、国旗を掲げた家の前に立つ少女、初日の出を拝む祖父と兄弟、カルタ取り餅焼き書初めの光景、羽根突きをする少女たちなど、九点。

その他は、直前期と同様、家屋や立ち木を山を背景に描いたり、山すその家屋、家屋と畠といった風景画が大半をしめ、その他は、野菜や果物などの静物画。

以上、「図画」を検討してきた。その結果、直前期と比べて、作品の掲載数が増加したことによるのか、時局柄或は「戦時下」色のみられる絵柄が六点見られた。しかも、六点のうち、出征風景が三点もあり、「図画」の描かれ方からして、その様子を見ての作品化と推測できる。これほどまとまって掲載されたことは、この十五年第一四半期の特徴とってよからう。

以上、昭和十五年（一九四〇）第一四半期の一、二、三月の「児童文化」について、その位相と展開を検討してきた。

第一四半期を、以下、まとめ的に概括しておく。

内容に時局柄或は「戦時下」を反映していると考えられる作品の掲載は、次のような状況であった。

「綴方」では、六二作品のうち一三作品。

「詩」では、八四作品のうち一〇作品。

「短歌」では、六〇作品のうち二三作品。

「俳句」では、九八作品のうち一九作品。

「書方」では、二七七作品のうち「紀元二千六百年」をのぞいて一

九作品。

「図画」では、八一作品のうち六作品。

因みに、直前の昭和十四年第四四半期は、次のようであった。

「綴方」では、六五作品のうち一四作品。

「詩」では、七六作品のうち一一作品。

「短歌」では、二一作品のうち六作品。

「俳句」では、七三作品のうち九作品。

「書方」では、三六〇作品のうち三七作品。

「図画」では、二七作品のうちナシ。

掲載作品数と時局柄或は「戦時下」色の見られる作品は、直前期と十五年第一四半期とでは、「綴方」と「詩」において、ほぼ同様の位相となり、「短歌」「俳句」「図画」では、第一四半期に掲載数と時局柄或は「戦時下」色の見られる作品が増加した。「書方」では、掲載数の大幅減少があり、また、懸賞募集作品の発表から「紀元二千六百年」が六〇作品あり、関連の作品を加えると六六作品に及ぶ。懸賞募集作品六〇を除くと、二五作品。やはり、掲載数の減少に比例しているようである。また、特に、「図画」では、掲載数と時局柄或は「戦時下」色の見られる作品の、両者の増加は著しいものがあったということになる。

昭和十五年第一四半期の、このような位相は、「戦時下」の状況が前年第三、第四四半期とほぼ同様な推移を辿っているにもかかわらず、「図画」に特徴的なように、児童にとって「戦時下」が一層「日常化」し、その密度が濃くなったといえよう。

（二〇〇三・一一・八）